

## [生活]

# やぎの長期飼育を通して、学びの質を高める指導方法の工夫 - 2年間の連続した学びと異学年合同学習の効果 -

涌井千賀子\*

### 1 はじめに

生活科が平成4年に本格実施され、子どもの主体性つまり「子どもの思い」を大事にしなければならないという発想が教師の中に浸透してきていると木村は述べている<sup>1)</sup>。筆者も、生活科の学習を行う中で、子どもの考えや発想を中心に指導計画を立て、子どもの思考の流れの変化に伴って授業の展開を工夫してきた。

木村(2012)は、「意欲的な学習や生活の実現」「子どもの主体性の育成」という生活科設立当初の目的は概ね達成されていると考えてよい<sup>2)</sup>としているが、一方で、画一的でマンネリ化といわれても仕方ないような実践が一部に見られ、悪い意味の「慣れ」が働き「教師主導」で「先に見える」生活科、単に活動だけにとどまってしまっている実践が行われている<sup>3)</sup>ことを課題として挙げている。

筆者も多くの飼育動物が学校現場で飼われるようになり、飼育を始めた当初こそ指導計画を練り子ども主体の授業展開が行われていたであろうが、長年の飼育によりそこに動物がいるから学習するというように強い意図のない学習が行われている気がしてならない。これは、動物に限ったことでなく、どの単元においても20年間の生活科実践の蓄積により、実践ありきで目の前の子どもが置き去りにされていることに起因しているのではないだろうか。

平成20年発行の学習指導要領生活科改訂の趣旨でも、生活科の課題として、学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていない<sup>2)</sup>として挙げられている。野田は、生活科では活動しているだけでは十分でなく、なんらかの気づきが得られることが重要であるとしている<sup>3)</sup>。さらに、授業では、繰り返したり試行錯誤したりする十分な時間を確保したり、活動や体験したことを表現する機会を設けたり、伝え合い交流する場を工夫することが必要であると述べている。

そこで、生活科の動物飼育に当たっても、

- ①十分な話し合いの場を設け、繰り返し試行錯誤する。
- ②活動や体験を表現する場を設定する。
- ③伝え合い交流する場を工夫する。

の3点を指導計画の中へ位置付け繰り返し活動することで、本来の生活科の趣旨であった子どもの思いに沿った指導が展開できるようになる。

また、野田は、気づきの質が高まることについて①「気付く」から「分かる」に高まること、②「一つ一つの(個別の)気づき」から「関連付けられた気づき」に高まること、③「対象への気づき」から対象への気づきのみならず対象に映し出される「自分自身への気づき」が生じる3点を挙げ、生活科では、気づきの質が高まることで次の活動や体験の一層の充実につながることを目指しているとしている。

活動や体験を表現する場では、甫仮が、体験活動と表現活動を相互に繰り返す過程が、自分自身の頑張りや成長を自覚する児童の姿を引き出すことを検証している<sup>4)</sup>。体験活動と表現活動の一体化で「新たな気づき」を自覚し次の体験活動を促している。

本研究においても、活動や体験と表現活動を相互に繰り返す過程を指導計画に位置付けることとする。また、甫仮が言うように個々の児童の気づきの変容については検証されているが、課題として個々の児童の気づきと他者の気づきの関係性については課題となっている。

\* 魚沼市立堀之内小学校

## 2 研究の目的と方法

今回の研究では、次のような目的をもって追究し、その成果と課題を明らかにする。

### やぎの長期飼育を通して、気付きの質を高める指導方法の工夫

やぎの長期飼育では、気付きの質を高める「気付く」から「分かる」「関連付ける気付き」「自分自身への気付き」を促すことで、活動が活性化し、さらなる進化した気付きへとつながる。そのことは、生活科設立の趣旨にも一致する。自ら考え、表現し、他者と関わろうとする子どもの育成につながる。また、繰り返し対象にかかわることで愛着が生まれ、対象への思いがでる。長期飼育では、困難さにつづき考え気付きを深める必要性が出る。

以上の理由から上記の研究テーマを設定した。

研究テーマに向けて、次のような手立てを講じる。

- (1) 気付きを促すために、①：話し合い・試行錯誤、②：活動・体験・表現、③：伝え合いを指導計画に繰り返し位置付ける。
- (2) 2年間にまたがる動物飼育と、1年生と2年生の同時期、同単元を指導計画に配置し、連続した学びを保障する。
- (3) 1年生、2年生の合同単元では、相手に伝える活動を取り入れる。
- (4) 活動→話し合い→ワークシート（記録）を基本的なサイクルとし、活動の後には、その活動を振り返る場を設定する。

本研究は、1年生から2年生までの連続した単元構成をすることで子ども主体の活動を促し、対象物への気付きを深め、異学年との活動を促進し相手の気持ちを考え行動する実践力を養うことを明らかにする。

また、次のような方法で、指導の工夫や手立ての有効性や課題を実証する。

### ①単元での児童の活動や態度の変容 ②児童の学習シート、絵日記、話し合い活動での発言

## 3 実践の概要

(1) 単元名 「やぎさんとなかよし」

(2) 単元の目標

- やぎの世話を進んで行おうとしたり、やぎのことを考えようとしていたりしている。
- やぎの喜ぶことやどんな世話をしたいか考えたり話し合ったり表現したりしている。
- やぎの成長を実感し、変化に気付いている。

(3) 単元設定の工夫

実践校では、平成21年度よりやぎの飼育を生活科の学習として取り入れている。開始当初は、やぎを飼うために、「近所に鳴き声が聞こえると迷惑だから、お願いに行こう。」など、子どもらしい発想でやぎを飼うための準備や期待感をもって飼育にあっていた。自分たちで決めたことだからと、日常のやぎの世話も子どもの意見を尊重して行い、1年生の子どもにとっては、荷の重い嫌な世話も進んでやろうとする子がほとんどであった。

やぎの飼育を始めて4年目の平成24年度はやぎも4代目となり、地域の人や近くの幼児に人気のある存在となっていた。一方で、子どもの意識は、自分たちが「飼いたい」という強い意志が薄らいでいる気がしてならない。

そこで、1年生の6月から2年生6月までの1年間を1つの単元とし、連続した学びができるように単元構成を工夫した。単元では、気付きの質を高める観点として、①話し合い・試行錯誤②活動・体験・表現③伝え合いを意図的に位置付け、表現活動については、活動・体験、表現が繰り返し行われるよう位置付けた。

また、5～6月は、1年生と2年生の学習が重なるように配置し、伝え合う活動が意図して組めるようにした。2年生にとっては、「1年生に教える」という活動を取り入れることで相手に何をどのように伝えればよいのか目的意識をもつことができる。1年生にとっては、分からないことを質問するという形で自分の考えを表現することができ目的意識をもって活動することができるように単元の配列を工夫した。

(4) 指導と評価の計画

本研究対象「どうぶつさんとなかよし」単元構成は以下の通りである。

なお表中の単元名は小単元名であり、網掛けは1年生と2年生の合同単元である。

年度	時期	◎小单元名 ○学習内容 ・学習活動	○主な評価規準・評価方法
一 年 生	6月	◎やぎさんのことを知ろう。(4 H)	○これから世話するやぎのことを知ろうとしている。 【関心】 ・発表・観察
		・2年生から、やぎのことを教えてもらったり、分からないことを2年生に聞いたりする。【伝え合う】 ・1年生がやぎを飼うことについて考える。【話し合い】 ・2年生のやぎの世話の様子を見学する。【活動・体験】 ・2年生から、やぎの世話を教えてもらう。【活動・体験】 ・2年生へ、やぎを飼いたいことを伝える。【表現】【伝え合う】	
	11月	◎1年生が飼うやぎさんの入学式をしよう。(6 H)	○やぎの世話の仕方を教えてもらい、やぎの飼育に意欲をもつ。【関心】 ・観察・シート
		・やぎの世話の仕方をさせてもらう。【活動・体験】 ・入学式の準備【活動】【表現】【話し合い】 ・やぎの入学式をする。【活動】【表現】【伝え合い】 ・やぎの紹介を全校児童にする。【表現】【伝え合い】	
	12月	◎やぎさんに家族をつくろう。(6 H)	○やぎの世話を振り返り、寒くなる冬に向けて継続して飼うか考える。【気付き】 ・話し合い・シート ○やぎの結婚式の計画を立て、これからも、やぎを飼おうとする意欲をもつ。【関心】 ・観察・シート・発表
		・秋や冬のやぎの飼育について考える。【話し合い】 ・結婚式をするかどうか話し合う。【話し合い】 ・やぎの結婚式の計画を立てる。【活動】【表現】【話し合い】 ・やぎの結婚式をする。【活動】【表現】【伝え合い】	
◎冬のやぎさん(2 H)			
二 年 生	4月	◎おめでとう！やぎさん(2 H)	○冬のやぎの世話を聞き、どうしたらよいか考える。【思考】・シート
		・やぎの赤ちゃんの誕生を祝う。【活動】【表現】	
	6月	◎やぎさんのことを教えよう。(4 H)	○赤ちゃんの誕生を全校の人に知らせ、自分の成長と重ねて考える。【思考】 ・シート
		・1年生に、やぎのことを教えたり、質問に答えたりする。【伝え合う】 ・1年生がやぎを飼うことについて考える。【話し合い】 ・やぎの世話の様子を見せる。【伝え合う】 ・1年生に、やぎの世話を教える。【活動・体験】【伝え合う】 ・自分たちがやぎを飼うことについて考える。【話し合い】	
◎2年生が飼っていたやぎさんの卒業式をしよう。(6 H)	○1年生に分かるようにやぎのことを教える。【思考】 ・発表・シート		
・やぎの世話の仕方を一緒にする。【活動・体験】 ・卒業式の準備【活動】【表現】【話し合い】 ・やぎの卒業式をする。【活動】【表現】【伝え合い】			

◎やぎさんのお世話をしよう。  
・継続的な飼育活動  
【活動】  
・振り返り  
【話し合い】  
【表現】

### (5) 授業の実際

#### ① やぎのことを教える

2年生は、やぎの世話を1年生の6月から継続して行っている。次の1年生が入学してくる頃には、約1年間やぎの飼育をしている。新1年生にやぎのことを教えることで、新1年生も学校の一員として迎えられられることを知らせ、やぎの好きなことや嫌がることを新1年生に教える会を設けた。(写真1)



写真1 1年生と2年生の合同学習

発表時の児童の主な内容(数字は、学年)

- 2C：やぎのえさは、入れ物に半分くらい入れます。  
 1C：もってくるえさは、どのくらいですか。  
 2C：みんなでもってくるので、少しずつでいいです。  
 1C：どうやって、そうじするのですか。  
 2C：そうじのやり方を見せるので、今度見に来て下さい。



写真2 1年生がやぎの世話を見に来る

#### ② やぎの飼育を実際に見せる

2年生の世話をしているところを1年生が見学する。見ている間に、自然と1年生から質問が飛び、質問に答えながらえさやりや小屋掃除をしている。1年生は、段取りよく活動する2年生にあこがれを抱き、いつか自分も挑戦したいと考えるようになる。(写真2)

#### ③ 1年生がやぎを飼うことについての2年生の話合い

- C：ぜったいに、別れたくないです。だって、今まで一緒にすごしたから、お世話ができないのは、嫌です。  
 C：1年生が飼いたいって言ったら、だめって言うのは、かわいそうだから、1年生が飼ってくれるならゆずってもいいかなと思います。  
 C：わたしたちが1年生の時に、2年生がやぎのお世話をゆずってくれたのがうれしかったから、わたしも、1年生に飼い方を教えてあげて、1年生にやぎ当番が上手になってほしいです。  
 C：ずっと飼っていたいけど、1年生にもゆずってあげたいです。ちゃんと、えさやりや小屋そうじをするなら、1年生にもがんばってやらせてあげたいです。

1年生と2年生の合同学習により、1年間たった子どもは、自分たちがしてもらったことを振り返り、自分たちのやぎへの愛着を実感しながら、2年生としての自分を見つめることができた。自分自身がやぎの飼育と上学年からの引き継ぎによって成長してきたことを実感しているのである。

#### ④ 気付きの質の高まり

以下は、子どもが1年生の時のやぎの入学式の際の振り返りである。

- A児：やぎのにゅうがくしきをしました。やぎはかわいいな。うれしいな。いろんなことをおしえてあげたいな。だいじにしたいな。  
 B児：やぎさん、ごにゅうがくおめでとうございませう。また、よろしくおねがいします。やぎさん、たくさんたべてね。ぼくたち、そうじとかさんぽもがんばるね。  
 C児：やぎのおせわをがんばります。かようびからやぎのおせわをがんばります。やぎのおせわをして、ぼくは、おおきくなったらやぎをかいたいです。  
 D児：ちいさなやぎがかわいかった。えさをたくさんあげておおきくなるといいです。さわってみるととてもきもちよかったです。おそうじをがんばる。おさんぽをがんばる。

上記のように、自分の気付きや思いを書いている。ところが、1年後の2年生になった時に行ったやぎとの卒業式後には以下のように変容する子がほとんどであった。

- E児：やぎがそつぎようするとさみしいです。でも、1年生がかうやぎは、きつとかわいいとおもいます。1年生は2年生がやり方をおしえたので、だいじょうぶだとおもいます。1年生がかっているやぎをひる休みに見たら、まだなれていないのでさみしそうにしていました。【関連付ける気付き】
- F児：ぼくは、言ばがかりで「きょうは、みるくちゃん、くるみちゃん、さくらちゃんのそつぎようしきにきてくださってありがとうございました。ぼくたちスマイル学年は、これで見るとみるくちゃん、くるみちゃん、さくらちゃんとおわかれです。でも、これまでにあったおもい出はぜったいにわすれません。」と言うかかりでした。ぼくは、言ばがかりで言ったように、これからもほんとのほんとのみるくちゃんたちのことをわすれません。【関連付ける気付き】【自分自身への気付き】
- G児：～前略～さい後のやぎとうばんの時、みるくちゃんやさくらちゃんやくるみちゃんが、やぎ小やで気もちよくくらせるように、きれいにしました。がんばりました。また、みるくちゃんたちにあいたいです。【関連付ける気付き】
- H児：～前略～みるくちゃんとくるみちゃんとさくらちゃんにさわられてよかったです。みるくちゃん、くるみちゃん、さくらちゃんがそつぎようしたのですごくかなしかったです。みるくちゃんとさくらちゃんとくるみちゃんがいっせいにメ～～～エとなきました。わたしは、さようならとみるくちゃん、くるみちゃん、さくらちゃんに言いました。【気付くから分かる】【関連付ける気付き】【自分自身への気付き】
- I児：～前略～ぼくは、みるくちゃんたちと、また、あいたいです。それまでがまんしてます。みるくちゃんは、もっと大きくなってほしいです。さくらちゃんとくるみちゃんも大きくなってほしいです。ぼくたちががんばったので、今井さんがすごくすごくよかったです。みるくちゃんも今井さんにあえてうれしかったとおもいます。【関連付ける気付き】【自分自身への気付き】
- J児：きょう、みるくちゃんとくるみちゃんとさくらちゃんのそつぎようしきがありました。いなくなるのは、ちょっとかなしいです。そつぎようしきでは、えさを食べるころがかわいかったです。3とうでならんで食べていました。おいしそうでした。みるくちゃんとくるみちゃんとさくらちゃんのこととはわすれません。うたったのは、「ビリーブ」と「スマイルアゲイン」です。どちらもよいうたでした。11時30分ころにげんかんに行きました。その後みるくちゃんとくるみちゃんとさくらちゃんにバイバイをしました。どこかへ行っちゃうすがたを見ていました。かなしくなりました。【自分自身への気付き】

#### 4 考察

今回の研究目的であった「やぎの長期飼育を通して、気付きの質を高める指導方法の工夫」について、つぎのように成果が明らかになった。

##### (1) ①話し合い・試行錯誤②活動・体験・表現③伝え合いを指導計画に繰り返し位置付けることについて

話し合い、活動、表現、伝え合いを指導計画に計画的に位置付け繰り返し行うことで、活動が活発になる姿が見られた。「やぎの入学式」から「やぎの卒業式」での子どもの振り返りシートで見られた変容は、1年間の小さな変容の積み重ねである。活動→表現（振り返り）→話し合い→活動→表現→伝え合いのサイクルの中で子どもの変容が見られ、試行錯誤しながら、やぎの卒業を見送るまでに成長する姿が見られた。繰り返しやぎにかかわることで愛着が生まれ、やぎへの思いが明確になっていった。やぎの長期飼育により、「関連付ける気付き」「自分自身への気付き」へと気付きの質も高まっていった。

##### (2) 2年間にまたがる動物飼育と、1年生と2年生の同時期、同単元を指導計画に配置し、連続した学びを保証することについて

長期の単元構成と異学年合同学習により「気付くから分かる」「関連付ける気付き」「自分自身への気付き」へと気付きの質の高まりが見られた。

卒業式のシートでは、自分自身への気付きに関する記述が多くみられることにより自分自身の成長を実感していることが分かる。また、同時期に同単元を1年生と2年生で行うことにより、1年生の姿を見て1年前の自分自身に気付き、2年生の姿を見て1年後の自分への意欲をもたせることができた。やぎの飼育を誰がするかということに関して、2年生から譲り受けた大事なやぎという価値付けをし、いつもいるやぎだけど、ぼくたちのやぎという意識をもたせることができた。また、2年生においては、2年生になったから交代という意識ではなく、自分たちがやぎの世話をできるよ

うになった自信と1年生にもそうなってほしいという他者意識をもたせることができた。

### (3) 1年生、2年生の合同単元における、相手に伝える活動を取り入れることについて

合同単元において相手に伝える活動では、相手意識をもって伝えることができた。伝え合いをする中で、1年生、2年生ともに気付きの質の高まりがみられた。

1年生は2年生を手本としながら、入学して間もない時期であるが、やぎのことを知ろうと質問をすることができた。2年生は、1年生の姿を見ながら、自分の成長を実感し、1年生のためにできることをしようという意識をもって合同単元学習に臨むことができた。

### (4) 活動→話し合い→ワークシート（記録）を基本的なサイクルとし、活動後に、その活動を振り返る場を設定することについて

活動→話し合い→記録のサイクルの単元構成は、子どもの活動を意味付け、確かなものにするツールとして効果的であった。

活動の後は、子どもの感想や次にしてみたいことの話合いを設定した。このことにより、やぎの飼育を2年生でも続けたいK児は「昨年度の2年生からゆずってもらったから、2年生はゆずるんだよ。」というL児の意見に1年前の2年生は今の自分と同じ気持ちであることに気付く。このように、話し合いの場を設定することで、自分の今の気持ちを確かな学びとして位置付けることができた。その後のワークシート（記録）では、ゆずらなければいけない友達の意見とよぎを飼っていた自分との葛藤を表現するなど、子どもの気付きの質の高まりが見られた。

これらの単元構成の一連の流れは以下のようになる。

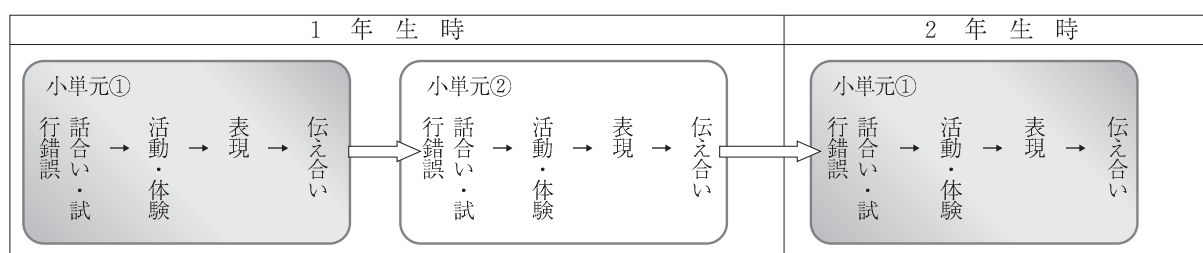


図1 1年生から2年生までの長期単元の流れ

## 5 課題

本研究では、2学年の長期に渡る単元構成と1年生2年生の合同単元の実施により、子どもの気付きの質が高まることが明らかになった。1学年においては、目標とするモデルがそこにいるだけで、対象へのあこがれや動物飼育への意欲が高まることが分かった。また、2学年においては、1年前の自分の姿を1年生と重ね合わせることで自分自身の成長を実感することができることが分かった。

今回、1年間の活動の中で気付きの質が高まることの有効性はあったが、小単元の中での、子どもの気付きの質はどのように変容しているのかを明らかにし、小単元の構成の工夫につなげていきたい。また、他の単元でも異学年同単元の構成は可能であるか探していきたい。

## 引用文献

- 1) 木村吉彦『生活科の理論と実践－「生きる力」をはぐくむ教育のあり方－』、日本文教出版、2012年、p.6
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』、2008年、p.5
- 3) 野田敦敬編著、安彦忠彦監修『小学校学習指導要領の解説と展開 生活編』、2008年、p.6
- 4) 甫仮直樹「対象に愛着をもち、自分自身への気づきを自覚する生活科の学び」上越教育大学学校教育実践研究センター教育実践研究第23集、2013年、p.156

## 参考文献等

日本生活科・総合的学習教育学会 『生活科・総合の実践ブックレット第5号』2011年

文部科学省 『小学校学習指導要領解説生活編』、2008年

木村吉彦 『生活科の理論と実践－「生きる力」をはぐくむ教育のあり方－』、日本文教出版、2012年

木村吉彦監修、仙台市教育委員会編 『スタートカリキュラム』のすべて、ぎょうせい、2010年